

「いわて三陸ジオパーク構想」に資する淡水魚類相の現況把握と象徴種 (Flagship species) の選定

鈴木正貴

1. 背景と目的

ジオパークとは、地球科学的に重要な自然遺産を含む、自然に親しむための「大地の公園」である(尾池ら 2011)。その内部には、地質遺産だけでなく、考古学的・文化的、さらには生態学的価値のあるサイトも含まれている(日本ジオパーク委員会 HP)。また、世界のジオパークを紹介するパンフレットには動植物の写真が散見し、ジオパークのPRに一役買っている。したがって、「いわて三陸ジオパーク」構想においては、パーク内に生息・生育する動植物に関する知見を得ることが必要と思われる。そこで、本研究は、「いわて三陸ジオパーク」構想に資する動植物の知見として、岩手県太平洋沿岸部に生息する淡水魚類相に着目し、その現況把握と象徴種(Flagship species)の選定を試みた。

2. 研究の方法

2-1. 文献・聞き取り調査：岩手県内に生息する淡水魚類に関する文献調査と、今年度のサケ捕獲量の状況に関するデータ収集と関係機関への聞き取りを行った。

2-2. 現地踏査：平成 23 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災がもたらした淡水魚類の生息環境の改変状況を把握するため、沿岸部を踏査した。

3. 研究の成果

3-1. 岩手県内の淡水魚類相：岩手県内には、遺伝的な分化を含めると、総計 74 種類が確認されている(岩手県 2001)。これらの生息確認種を生活環で大別すると、純淡水魚と通し回遊魚に分けられた。内陸部の河川は海域との距離が長いのに対して、沿岸域の河川の多くは海域との距離が短い。したがって、沿岸域の河川は、通し回遊魚の主な生息水域として機能し、岩手県内の淡水魚種数の増加に寄与していると考えられた。

3-2. 沿岸部水域の環境改変：通し回遊魚の生活環に着目し、河川横断工作物や、これに付設する魚道の被災状況を確認したところ、倒壊している工作物であっても、通し回遊魚の移動経路は、概ね確保されている状態であった。

一方で、サケ・マス類など海へ下る個体が一時生息場に利用する藻場が、広範囲にわたって消失していることが確認された。したがって、今冬に孵化した個体の回帰率の低下が危惧された。

3-3. 象徴種の選定：尾池ら(2011)は、ジオパークの醍醐味の一つとして、「その土地の食材を地酒とともに味わって、大地の恵みを実感すること」をあげている。前述のとおり、沿岸部の淡水魚類相の特徴は通し回遊魚の多いことであり、通し回遊魚であって、かつ美味しい食材である魚種といえば、沿岸部の代表的な漁業資源であるサケ *Oncorhynchus keta* であろう。したがって、サケは三陸ジオパークの象徴種の一つとして選定できるのではないだろうか。他方で、本種については、被災によって定置網の設置数が少ない状況下でも、河川捕獲数が増加していないことや(岩手県水産振興課 HP)、前述の藻場の消失など、今後の生息数減少が危惧されている。

4. 今後の展開

文献調査の過程で、沿岸域における淡水魚類相の地理的分布に関するデータが不足していると感じた。そのため、今後は、沿岸域を流れる河川ごとに生息魚種を調査し、これら取得したデータをもとに、あらためて象徴種の検討を行う予定である。

【引用・参考文献】

岩手県(2001)野生生物目録「淡水魚類」。
岩手県水産振興課「秋サケ漁獲速報」(HP)。
日本ジオパーク委員会「ジオパークとは」(HP)。
尾池和夫・加藤碩一・渡辺真人(2011)日本のジオパークー見る・食べる・学ぶー, ナカニシヤ出版。

鈴木正貴

(すずきまさき)

総合政策学部助教

専門：農業土木学

農村生態工学

